

房総の 文化財

VOL. 10

ISSN 0910-0848
Bōsō no bunkazai

平成8年9月9日

財団法人 千葉県文化財センター

千葉県四街道市鹿渡809-2

TEL 043-422-8811(代)

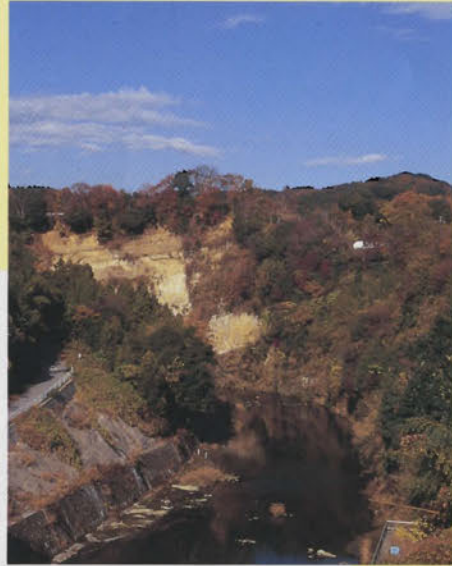
FAX 043-422-8850



発掘調査速報

山のくらしも悪くない～君津市寺ノ代遺跡

みなさんは亀山^{かめやま}って知ってますか。木更津市から久留里線にゆられて1時間、終着駅が上総亀山駅です。亀山温泉、ブラックバスのメッカの亀山湖などなど、房総丘陵に囲まれた美しい観光地として有名です。君津市の一番奥に位置します。



今年の秋、あたり一面が紅葉の季節に、ここ亀山の寺ノ代遺跡の発掘調査を行いました。調査担当の職員、山のなかの遺跡とは聞いていたものの、現地に着してみると、なんと標高約100mの山の頂上、亀山湖を見おろすがけの上が寺ノ代遺跡でした。

さっそく調査開始。こんな山の頂上でなに出てくるやら…。山の頂上の遺跡は、信仰や修行のあとが発見される例は多いのですが、寺ノ代遺跡は予想はおおはずれ。いきなりおどろくほど大量の縄文土器が出てきました。調査が進むにつれ、弓矢の先、木を切ったり穴を掘る道具、木の実をつぶす道具など、ごく普通の生活に必要な道具が続々と出てきました。一番おどろいた物は、直径1mもある石皿^{いしざら}です。丸い石で木の実をつぶすと



きに使う台なのですが、こんなに大きな石皿は千葉県でも初めてです。長い時間、この村に人間が暮らしていた証拠です。たくさん集めた木の実をこの石皿を使ってつぶしていたんですね。

寺ノ代遺跡からは家の跡もみつかりました。家の真ん中には、炉^ろ（いろり）もみつき、火を使ったため、土が真っ赤に焼けていました。つぶした木の実を煮たり、魚を焼いたり、寒いときは暖房がわりに使ったのでしょう。

炉の赤い土や石皿を見つめると、自然に囲まれた縄文時代のたくましい毎日の暮らしが思い浮かんできます。コンビニやテレビや鉄道や高速道路になれき



ってしまった私たちの毎日の暮らし。結構便利に見えるように見えても、実はこんな生活は、山や川や海、花や木の実といった、私たちの身近にある遠い昔の財産を忘れさせてしまっているとも思えてきます。「山の暮らしも悪くないなあ」…、それが担当職員が寺ノ代遺跡の調査を終えて、次の現場へ向かうときの感想でした。



収蔵遺物コーナー

これ、なんだ？～市原市市原条里制遺跡

わかっているようで、実はあまりよくわかっていないことが、考古学の世界ではよくあります。道具の使い道などがい例です。たとえば縄文時代、いろいろな種類の石器が発見されていますが、すべての石器についてその使い道がわかっているわけではありません。そんな時、私たちは、似たような石器を使っている外国の民族の例や、日本の昔ながらの道具と比較をして、使い道をあれこれ想像します。

古墳時代以降になると、石器は姿を消し、木や鉄でできた道具が広がりますが、残念ながら木はくさり、鉄はさびてしまい、どんな道具があったのかさえもわかりにくくなっています。

市原市の市原条里制遺跡は、弥生時代以降の田んぼの跡が見つかった遺跡として有名ですが、田んぼの跡だけあって、おもしろい道具が見つかりました。かまぼこのような形をした木に、半月の形をした鉄の刃が、釘でとめられていた不思議な道具です。木には何のためだか穴もあいていました。この道具は古墳時代から平安時代くらいの田んぼのあぜのなか

から、木のげたや、木のいれものなどと一緒に見つかりました。ちなみに、このかまぼこ形の木は、木の種類に詳しい先生に聞いたところ、杉であるとのことでした。

さてこの道具、なにに使った物なのか、ひとめ見ただけではわかりませんでした。そこで、日本の昔ながらの道具と比較するために、あれこれ調べてみました。すると、福島県の会津^{あいづ}地方で昔使われていた「コウガイ」という、穀物を収穫する道具に似ていることがわかりました。しかもあいていた穴は、ひもをつけて、指をいれて、手と道具を固定するためのものだということまでわかりました。

さて皆さん、ここまで説明すればもうわかりましたね。稲刈りの道具です。稲穂を刈るための穂摘具^{ほつみぐ}といひます。今でこそ稲刈りは大きな機械であつという間に終わってしまひますが、昔はやっぱり手作業、こんな小さな道具で、一生懸命に穂刈をしていたんですね。

千葉県内の最新出土考古資料の一大集合展「地中からのメッセージ」開催中
市原条里制遺跡穂摘具・鶴ヶ岡1号墳ガラス小玉鏝型他20遺跡約800点

遺跡今昔物語

草むらと水の大変身～福増浄水場物語

今回ここで紹介した君津市寺ノ代遺跡や、市原市市原条里制遺跡から出た稲を刈る道具など、遺跡の発掘調査をすると、いろいろな時代の、さまざまな道具や生活の跡などが発見されます。それでは、なぜ発掘調査を行うのでしょうか。

いいものが出てきそうだから…、工事をしていたらなんか出てきちゃったから…。こんな答えはちょっとちがいます。千葉県は遺跡の宝庫。どこにどのような遺跡があるのか、あらかじめ調べてあります。ですから、道路や、建物をつくるとき、その場所が遺跡だったら、工事の前に、私たちが調査を行うことになっているのです。

今から10年前、市原市に大きな浄水場をつくることが計画されました。私たちが浄水場の建設予定地を初めて訪れたとき、その場所は、市原市内を見おろすことのできる台地の上、見渡す限りの広い草むらでした。この場所は市原市福増^{ふくさへ}というところで、縄文時代の遺跡であることはわかっていました。ところがこの地名を調べてみるとびっくり、土器石（かわらけいし）という名前がついていました。昔から土器や石器がたくさんひろえた場所だったんですね。



調査開始…。予想通り縄文時代の大きな村の跡でした。家の跡が約500軒、食物をたくわえたり、お墓に使う穴が1000基も見つかり、調査前の、見渡す限りの広い草むらは一転して、野山をかけめぐる縄文人の暮らしを、いきいきと想像させてくれる場所に变身しました。



調査も終わり、いよいよ浄水場の建設、そして完成…。養老川^{やうろうがわ}を流れる水は、ここ福増浄水場で、市原市民や千葉市民にとって欠かすことのできない大切な飲み水に大変身。調査前の草むらも、近代的な設備を整えた、浄水場に変身しました。

調査前ののどかな景色、調査中のいきいきとした景色、そして完成した近代的な浄水場…。私たちが目にした移りゆく景色のなかにも、昭和・平成のちょっとした小さな歴史が刻み込まれているんですね。

今後も「遺跡今昔物語」のコーナーでは、発掘された遺跡をとおして、私たちの身の回りの、平成の小さな歴史をご紹介します。ゆきたいと思ひます。

たけし 武士遺跡かんたん年表

旧石器時代（約30,000年前）

人がくらし始め、石器のまとまりが60ヶ所つくられる

縄文時代

草創期・早期（約10,000年前）

炉穴^{ろけつ}という調理場が20基つくられる

貝殻で文様をつけた土器が流行する

前期（約7,000年前）

一時誰も住まなくなる

中期（約5,000年前）

円形の住居が約100軒つくられ、にぎわう

後期（約4,000年前）

大きな村がつくれ、にぎわう

柄鏡^{へがき}形住居などの家が約400軒つくられる

食べ残した貝殻が多く捨てられ、貝塚^{かいづか}ができる

土器がたくさんつくられる

（ダンボール箱で5,000箱分もみつかる）

晩期（約3,000年前）

一時人が住み、土器がたくさんつくられる

石製の玉のネックレスが流行

弥生時代

中期（西暦0年くらい）

再葬墓^{さいさいぼ}というお墓が4基つくられる

後期（西暦300年くらい）

約60軒の家がつくれ、

方形周溝墓^{ほうけいしゅうこうぼ}というお墓がつくられる

古墳時代（西暦600年くらい）

丸い古墳が1基つくられる

奈良時代（西暦710年～）

方形周溝状遺構^{ほうけいしゅうこうじょういこう}というお墓が約40基

つくられる

お寺がつくられる

住居が1軒だけつくられる（お墓の管理人が住む？）

平安時代（西暦794年～）

誰も住まなくなる

・

・

・

平成5年

福増浄水場完成 給水能力90,000m³/日



埋文アウカルト

●大きな縄文土器・ 小さな縄文土器



縄文土器には、時期や地域のちがいでいろいろな形や文様があり、バラエティーが豊富なので、見ているだけで楽しいですね。見学会や展示会でも人気者です。

大きさもいろいろで、大人が抱えようと思っても動かないような大きくて重い物から、指でつまめるような小さなものもあります。

大きいものは、肉厚で丈夫そうです。水を入れたり火にかけたりして日常の生活に役立ちそうです。また、木の実を発酵させてお酒を作ったり、人が亡くなったときには棺として使われたと思われるものもあります。

小さなものには、とても精巧に丁寧に作られたものと、つくりが悪くすぐ壊れてしまいそうで実用に向いていないものもあります。祭りやまじないのために作ったのでしょうか。

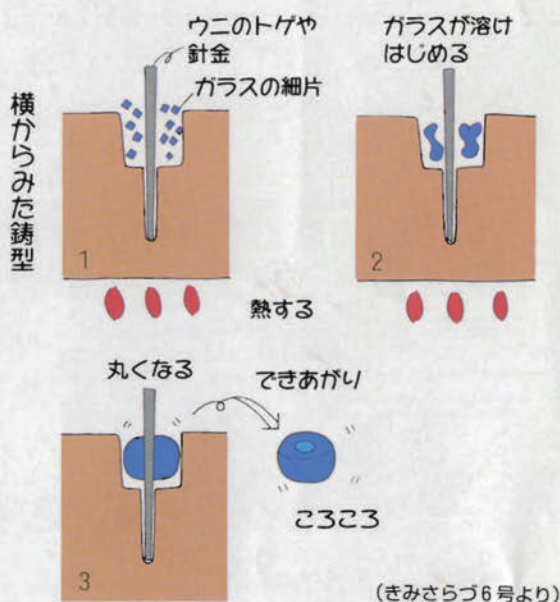
写真は縄文土器の大きさの違いを表すために武士遺跡から出土した土器から大きさの違うものを選んでみました。同じ土器でもずいぶん違うことがわかりますが、集めてみるとなぜか仲の良い家族のようにも見えます。

Q&A

「地中からのメッセージ」第1回最新出土考古資料巡回展 質問から
展示品の木更津市鶴ヶ岡1号墳のガラスの小玉の
鑄型は、木更津で使われたのですか。
また材料はどうしたのですか。(千葉市20代女性)

A 鶴ヶ岡1号墳のガラスの小玉の鑄型は、4世紀代にまでさかのぼる出土例としては、全国で3遺跡目の貴重なもので、8世紀までに幅を広げても11遺跡しかないものです。右図の作り方は発掘した君津郡市文化財センターの方々が復元実験をし、成功した方法です。
鑄型ばかりでなく、失敗品も出土していますので木更津で製作されていたことは間違いありません。材料は、どのようなものが、どんな方法で入手されていたかわかっていません。国産ガラスの生産は6世紀以降ですので、原料ガラスは輸入され、何らかの経路で、千葉県にまでもたらされたことになります。ひょっとして、使用していた管玉・小玉などのガラス製品が破損し、リサイクルされたものもあったかもしれません。

写真は四街道市川戸下遺跡の古墳時代前期の住居跡の床面から出土したガラス小玉の鑄型です。昭和54年に発掘されましたが当時は何に使われたものかわかりませんでした。同じような例があって重要な遺物であることが明らかになりました。鑄型の中でも全体のわかる貴重な資料です。発掘品の中にはこのように「再発見」される資料もあります。



(四街道市教育委員会保管)

地中からのメッセージ

第一回最新出土考古資料巡回展

●会場…千葉県立上総博物館
平成八年九月十三日～十月二十日
●会場…千葉県立大利根博物館
平成八年十月二十六日～十一月十七日